

論文審査の要旨 (甲)

申請者領域・分野 氏名	病態制御科学領域 病態病理学教育研究分野 氏名 羽賀理恵
指導教授氏名	水上 浩哉
論文審査担当者	主 査 今泉 忠淳 副 査 上野 伸哉 副 査 澤村 大輔
<p>(論文題目) Clinical utility of skin biopsy in differentiating between Parkinson's Disease and multiple system atrophy. (パーキンソン病と多系統萎縮症の鑑別における皮膚生検の有用性)</p>	
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>パーキンソン病と多系統萎縮症は、病初期ではしばしば鑑別が困難であり、感度の高い診断法の開発が求められている。パーキンソン病と多系統萎縮症の鑑別には、皮膚でのαシヌクレイン凝集や皮膚での末梢神経密度が有用であるという報告もある。しかしながら、皮膚生検組織を用いたこれらの方法の有用性は未だ明らかでないことが多く、また、これらの計測結果に対するL-ドパ治療の影響も不明である。本研究では、パーキンソン病患者 38 例（うちL-ドパ投与群 26 例、非投与群 12 例）および多系統萎縮症患者 13 例の下腿外踝上方 10cm あるいは胸部正中から得られた皮膚生検組織を対象とし、1) αシヌクレイン凝集の免疫蛍光染色、2) 最近標準化された表皮内神経線維密度 (IENFD) の定量法による皮膚基底膜を貫通する神経線維数の計測による定量、を行った。結果は以下のとおりであった。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 神経線維上のαシヌクレイン凝集はパーキンソン病患者の 5.6 % で認めた。 2) 多系統萎縮症患者では生検皮膚で神経線維上のαシヌクレイン凝集は認められなかった。 3) IENFD はパーキンソン病患者で多系統萎縮患者と比較し低下していた。 4) パーキンソン病患者の IENFD はL-ドパ治療の有無で差がなかった。 <p>本研究は、最近標準化された IENFD の定量法を用いれば、皮膚基底膜を貫通する神経線維数は、パーキンソン病患者ではL-ドパの投与に関係なく MSA 患者に比べて低いことをはじめて明らかにし、この方法を用いれば両疾患の鑑別に有用である可能性を示唆した新規性の高い論文であり、学位授与に値する。</p>	
公表雑誌等名	Parkinson's Disease 2015 Article ID 167038 に掲載